

## 作りっぱなしの時代から、作って使いこなす時代へ

京都大学大学院工学研究科 教授

宮川 豊章

私は土木材料、特にコンクリートおよびその関連材料、さらにこれらを用いた構造を専門分野としている。コンクリートは、山陽新幹線でのコンクリート隕落下事故以降、マンション問題を含めてどうも疑問視されることが多く、近年旗色が悪かったようである。しかし、適切に設計、施工した場合、本来、コンクリート構造は、丈夫で美しく長持ちするはずなのである。そのため、私のスローガンは、“丈夫で、美しく、長持ち”であり、講演ごとに強調している。

このような劣化問題に対して、新設、既設を問わず塗料が重要な役割を果たすことが多く、特に補修関係では多用されていると言っていいだろう。しかし、いわゆる「コンクリート屋」は塗料を嫌うことが多い。化粧美人ではなく、素肌美人が多い。私は少なくともコンクリートについては必ずしもそうではないので、「いわゆるコンクリート屋」とは少し違うのかもしれない。

ところが、“長持ち”を研究テーマにすると困ったことも多い。まずは、長期間のデータがないことである。たとえあったとしても、「その塗料はもう使われていません。」、などと平然と言われてしまうことも多い。いやしくも塗料をこの世の中に流布させようとするなら、その行く末までの責任をとるべきではないだろうか？

延喜式による祝詞からすると、日本では、罪は風によって、川から海へ、海から地底へとはらっていけば、失われうることになっているらしい。この祓

除の考え方は、今日広く行われている“おはらい”の根源であって、現代日本にありがちな、罪過などは隠蔽し、先送りしていけば、いずれ消失するにちがいないとする考え方の原型をここに見ることができるのである。

私は決して美しい日本が嫌いではない。しかし、この先送りの考え方が、特に丈夫で美しく長持ちすべき塗料、ひいてはコンクリート構造物にふさわしい考え方ではなかろう。しかも、塗料、特に土木コンクリート構造物にかかわる塗料については、その本当のオーナーである市民に対する説明責任が生じる筈である。いわゆる“アカウントビリティ”が要求されるのであり、土木技術者また塗料技術者は、誠実に説明しなければならないのである。この説明を通して、コンクリート構造物を、どのように使いこなして行くか、と言うシナリオが明確になるのである。

20世紀は、作ることが要求される、作れば良い時代であった。21世紀は、持続可能な発展が要求される、作ったうえで、上手く使いこなすことが要求される時代となる。このような場面での日本塗料検査協会の役割に期待するところは大きいのである。

